ISSN 1344-9087
The Association for Northeast Asian Studies Newsletter "*Ushitora*" No. 60

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第60号

● Contents ●

Topic: A view from my experience of the interdisciplinary project on `Siberia and Climate Change´. …… (Hiroki Takakura) 1
Northeast Asian Reports: [Lecture review] Message from the world heritage sites:
Power of the history of Hiraizumi and Iwami Ginzan Silver Mine. ……(Ken-ichiro Aratake) 2-3
Members´ Forum: Meiji Restoration for losers of Boshin War (1868). …… (Masahiro Tomoda) 4

論点

気候変動に関わる文理融合研究の経験

東北大学 東北アジア研究センター教授
（ロシア・シベリア研究分野・シベリア人類生態ユニット）
高倉　浩樹

私の専門は社会人類学であるが、とりわけ環境と文化との相互関係に関心がある。現代のシベリア先住民社会でフィールドワークを行い、極寒地での食料確保という生業適応についての研究資料を集めつつ、人類史における寒冷地進出の問題や、人類文化の多様性生成における環境の制約性と文化の可塑性について考えている。

そうした観点からすると、気候変動の人類学は、変化する自然に文化がどう応答するかを示す現象に正面から取り組む事ができるという点で大変魅力的な枠組みなのであった。従来の社会科学は自然を動かない背景として扱ってきた。しかし気候変動の人類学では、理系の知見を導入することで自然の変化を具体的に示し、これに対する社会の変化を捉えようとする。

具体的には、東シベリアの大河川レナ川の洪水に焦点を当てた課題だった。10月から5月の間に完全に凍結するこの川は、春になると融解し氾濫原は解氷（アイスジャム）洪水を引き起こす。その空間に歴史的に暮らしてきた牛馬牧畜を伝統生業とするサハ人社会は、なぜそのような場所に暮らしたのか、そして温暖化はどのような影響を与えているのかを問うものであった。

写真1．ヤクーツクから50ｋｍ程南にあるカンガラス岬の上からみたレナ川、中州の浸水状態がわかる（2010年5月・筆者撮影）

人類学・河川工学・リモートセンシングによる学際的な調査成果を総合化することで分かったのは以下である。人類学的調査からは、地域社会がまさに解氷洪水を前提とした適応文化を形成してきたことである。それは生業暦や、河川氷の凍結と融解に関わる詳細な語彙が発達していることにも現れている。解氷洪水は一見水害と思われるが、牧草地の草生産には好影響を与えるとして住民に認識されている。これを河川工学で説明すると、解氷洪水は流量のスケールから一時的なものに留まる傾向が強く、氾濫原の土壌改善・水域の活性化をもたらすという。リモートセンシングによる氾濫原の植生分析からは、森林域より氾濫原のNDVI（植生指数）が高いことが分かった。伝統的に夏と冬の宿営地の移動を行うサハ人の居住パターンを考えると、氾濫原を利用する生業は合理的な選択なのだった（**写真1**）。

近年の地球気候変動は、このレナ川中流域のミクロ環境に対して気温上昇だけでなく、湿潤化という影響を与えることが分かってきた。シベリアの広大な森林は温室効果ガス吸収源として重要な位置づけを持っており、従来、森林火災がその脅威として着目されてきた。湿潤化は東シベリアの低温乾燥の森林生態系の劣化と永久凍土の融解により深刻な影響を与えるものとして新たに注目されている。

湿潤化の影響は川の流水量にも作用し、その結果洪水の増加に寄与している。興味深いのは、この増加は春の解氷洪水ではなく、これに続く雪解け洪水や夏洪水として現出することである。気温上昇は、氷の融解には寄与するが、それが流氷となって河道に詰まって洪水となるかは別の次元の問題で、気温とは関係しない（**写真2**）。しかし住民の認識ではここ10年間で春の洪水が増加しており、それは気候変動分析だけではなく社会政策との関係で読み解く必要があるのだった。さらに従来、解氷洪水を恵みとしてきたサハ人社会にあって、近年増加している雪解け洪水や夏洪水に対しては専ら災害という負の影響を及ぼしていることも分かった。これはサハ人社会の伝統的生態適応の根幹に及ぶ可能性がある。

自然の変化に刻々と社会は対応しようとするが、適応不能の様態を示すこともある。人間社会は決して環境決定論で説明しつくすことはできないが、環境の影響なしに社会は成立しない、このことの面白さと可能性を実感したプロジェクトだった。さらに異なる学問分野が調査地と問いを共有し、互いの成果を統合することの可能性を確信した経験となった。

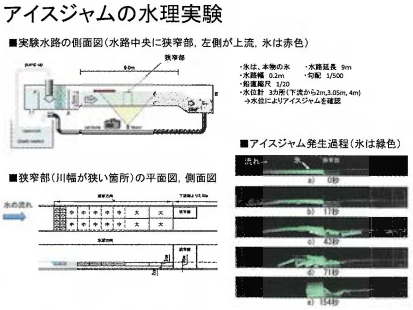

写真2．解氷（アイスジャム）洪水理解のための水理実験概要図（北見工大・吉川泰弘氏提供）

東北アジア通信

講演会 世界遺産からのメッセージ —平泉・石見銀山の歴史力—

東北大学 東北アジア研究センター准教授
（上廣歴史資料学研究部門） 荒武 賢一朗

平成25年12月7日(土)、仙台市戦災復興記念館において毎年恒例となっている公開講演会が開催された（主催：東北大学東北アジア研究センター、共催：東北アジア学術交流懇話会）。今回は、「世界遺産からのメッセージ—平泉・石見銀山の歴史力—」と題して、入間田宣夫氏（東北大学名誉教授、一関市博物館館長）、仲野義文氏（石見銀山資料館館長）のお二人をお招きし、貴重なご講演を頂戴した。

世界遺産とは、1972年の第17回UNESCO（国際連合教育科学文化機関）総会で採択された世界遺産条約（正式名称：世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）によって定義されたものである。2013年11月現在、981件（文化遺産759、自然遺産193、複合遺産29）の世界遺産が存在する（公益社団法人日本ユネスコ協会連盟ホームページhttp://www.unesco.or.jp/参照）。そのうち日本には17件の世界遺産（うち自然遺産4件）が登録をされ、現在も申請を予定、準備しているものもたくさんある。

日本で最近話題となったのは、富士山の世界遺産登録である。これまでも国内の世界遺産が決定するたびに、さまざまなメディアがそれを報じ、一般にも広く伝えられてきた。京都や奈良、そして沖縄といった歴史的に馴染みのあるところや、登録をきっかけにして知名度を大きく高めた屋久島や熊野古道も、名前を聞けばだいたいイメージができる。しかし、その重要性や意義は十分理解しているものの、世界遺産に関して知っていることがどれだけあるだろうか。今回の公開講演会を企画する出発点は、このような素朴な疑問からだった。

当日は予想をはるかに上回る125名の参加者があり、仙台市民や宮城県民のみならず、他県からも来場された方々がおられた。講師のお二人、また世界遺産というテーマへの注目度を示しているものと思われる（写真1）。

写真1．公開講演会の様子

最初に、岡洋樹・東北大学東北アジア研究センター長より開会挨拶がおこなわれた。そのなかでは、地域研究と歴史・文化の関係、そして世界遺産に関する研究が地域の発展や人々の生活に直結する意義について述べられた。

入間田宣夫氏には、長年ご自身が取り組んでこられ、世界遺産登録にも尽力をされた岩手県平泉についてご講演をいただいた。入間田氏のご専攻は歴史学（日本中世史）で、東北アジア研究センターの創設から教授として活躍された。現在は、岩手県一関市博物館の館長を務められ、東北地方の中世史を幅広く研究されている。平泉の世界遺産登録では、「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会委員に就任し、具体的な調査・研究に力を注いでこられた。その成果は、『日本の中世5 北の平泉、南の琉球』（中央公論新社、2002年）、『都市平泉の遺産』（山川出版社、2003年）、『平泉の政治と宗教』（高志書院、2013年）など多くの著書で披露されている。今回は、①世界遺産登録への流れ、②平泉の文化遺産に関する評価、③平泉と周辺の歴史的意義、といった3点に論点を集約され、わかりやすく説明いただいた（写真2）。

写真2．入間田宣夫氏

平泉の世界遺産の正式名称は「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—」（写真3）で、2011年に登録をされた。もちろん日本国内では従来から平泉の歴史・文化的価値は高かった。とくに、平安時代末期に奥州藤原氏が拠点にしていたとされる柳之御所遺跡の発掘（1988年）、その奥州藤原氏を描いたNHK大河ドラマ「炎立つ」の放映（1993-1994年）など、一般的にも広く浸透したことがある。2001年に日本政府における世界遺産暫定一覧表に記載されてから10年の道のりが費やされ、その過程にはさまざまな努力があったことを紹介された。また、平泉の世界遺産登録がなぜ実現したのか、という点についてもその歴史的事実を交えながら論じられた。印象的だったのは、入間田氏が登録決定の「決め手」と称された「一枚の絵」である。いずれもご自身の研究成果と、これまでの取り組みについて貴重な講演であった。

仲野義文氏からは、「世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』—普遍と固有の2つの価値から—」と題したテー

東北アジア通信

写真3. 平泉・中尊寺本堂

マでお話しをいただいた。仲野氏は、石見をはじめとする島根県の地域史研究を専門とされ、現在は石見銀山資料館の館長として活躍されている。著書『銀山社会の解明』（清文堂出版、2009年）では、石見銀山に関する歴史の流れや、それに関わる人々の社会状況について詳細をまとめられている。この世界遺産の登録にも専門家として尽力され、アジアで初めての鉱山遺跡「石見銀山」が世界遺産になった経緯をよくご存じの人物である。今回は、①石見銀山遺跡の概要、②銀山開発の歴史的意義、③銀生産の原風景と鉱山コミュニティ、など石見銀山に関する研究テーマをいくつかの大枠に絞ってご報告いただいた（写真4）。

写真4. 仲野義文氏

石見銀山遺跡は2007年7月、国内で14番目の世界遺産となったが、現在に至るまで「わかりにくい遺跡」というレッテルを貼られている。なぜ、一般的にイメージが浸透しないのかといえば、他の遺産と比較すると象徴的な建造物（平泉であれば中尊寺金色堂）がないことが挙げられた。その意味では、世界に名を馳せる普遍的価値と、一方でローカルな固有の歴史・文化が十分に議論されていないとの指摘がなされた。ここで述べられる「普遍」と「固有」は、このような意図から設定されている。世界遺産として評価された普遍的な価値には、以下のようなものがあった。16～17世紀初頭の「大航海時代」に、石見銀山の銀生産は東アジア・ヨーロッパの貿易国と日本の交流を創出した。また、日本の金属採掘と生産における技術的発展、日本経営モデルを進化させた。ほかにもたくさんの基準があるが、背景には当時の世界的な銀ブームによって政治・経済・社会・文化に大きな影響を与えたことが紹介された。準備を開始した段階では産業遺産であるという主張で、世界遺産としてアピールしようという動きもあった。しかし、ヨーロッパの人々からすると「産業遺産」とは産業革命以降のことを指しているので、石見銀山はその対象にならないという国際的にみる観念の違いについても言及された。日本の歴史、あるいはアジアの歴史において、特別な人物を当地が輩出しているわけではないが、世界的に社会を動かしていたことは事実である。その点で、地域の歴史・文化研究がこれまでより一層進められ、総合的に研究成果が出ることを期待したい（写真5）。

入間田、仲野両氏によって、世界遺産の歴史的意義や地域研究の重要性を改めて痛感させられた。今回は日本の、そして文化遺産の事例を専門家に詳しく解説していただいた。関心を持つ人々にとって、これほどぜいたくなことはないだろう。

終了後に出席者からアンケートをお寄せいただいた。そのなかで、参加しようと思った理由を尋ねると、半数近くの方が「世界遺産に関心があるから」と回答された。また、講師の先生方の研究・書籍に興味をひかれたことも大きかったようである。今後検討してほしいテーマについても、「環日本海文化圏」や「東北アジアの諸言語相互の関係」、あるいは「微生物の世界と地域発展」など、多彩で興味深いリクエストもいただいた。どれだけご期待に沿えるか不明であるが、最新の東北アジア研究についてご紹介できる機会を大事にしたい。新聞やテレビでは、なかなか深くまで情報を得られないが、このような講演会を通じて新たな知識の獲得に貢献できれば、この上ない喜びである。

今回の公開講演会は、ご多忙のなか貴重な成果をお伝えいただいた入間田、仲野両先生のおかげで盛会となった。両先生、および寒いなかお集まりくださった参加者の皆様方に末筆ながら厚く御礼を申し上げたい。

写真5. 現在の石見銀山

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。
今回は、2013年10月から東北大学東北アジア研究センターの助教として赴任した友田昌宏さんに専門の幕末・明治期の政治史のなかでも明治維新という重大な事件を米沢藩出身の政治家宮島誠一郎といった戊辰戦争の敗者というべき人たちの立場から問い直すことの意味について語っていただきました。

敗者の明治維新

東北大学 東北アジア研究センター助教（上廣歴史資料学研究部門） 友田 昌宏

宮島誠一郎（1838～1911）は幕末、米沢藩の周旋方として他藩との交渉や情報収集にたずさわり、とりわけ明治元年（1868）の戊辰戦争では、奥羽列藩の会津藩謝罪歎願書を京都の太政官に携行するという重要な任務を果たした。また、維新後は新政府に登用され、明治4年（1871）4月、当時在職していた左院に「立国憲議」を提出、いち早く立憲政体樹立の必要性を訴えた人物として憲政史上に名を留める。戊辰戦争の敗者たる宮島のなかで、いかにその立憲政体構想ははぐくまれていったのか、そもそも戊辰戦争とは彼にとっていかなる意味を有する体験だったのか、この問いが私を宮島へと誘った。幕末、探索周旋活動に従事するなかで、宮島は幕臣の勝海舟をはじめ様々な人物と交わりを結び、影響をうけ、自藩の歩むべき道を模索していく。当初、宮島は不時に備え藩力を養うことこそが藩の国家（日本）に対する勤めと考え、その任を忘れて、いたずらに国政に介入しようとする薩摩藩に対しては大きな反感をいだいた。そうした彼が、戊辰戦争を通じて、一藩を犠牲にしてでも尽くすべき忠誠の対象として国家（日本）を強く意識し、その国家の青写真を立憲政体というかたちで提示しえたのは、探索周旋活動で培ったネットワークがあったがゆえであろう（**写真1、2**）。

写真1. 宮島誠一郎（『養浩堂詩鈔』より）

写真2. 宮島誠一郎の『戊辰日記』（早稲田大学図書館所蔵）

しかし、同じく米沢藩にあって探索周旋活動に従事した人物でも、雲井龍雄（1844～1871）の歩んだ軌跡は宮島とはまったく異なっている。元治2年（1865）5月、藩主上杉斉憲に従って江戸に上った雲井は、儒者安井息軒の三計塾に入門、以後慶応2年（1866）4月までの約1年間、息軒のもとで研鑽を積んだ。彼は息軒の学風に傾倒するとともに、三計塾を基点として独自のネットワークを培っていく。塾の先輩には長州藩の広沢真臣をはじめ後に新政府の要職についた人物も少なくない。この後、江戸就学を終え国許に帰った雲井は、願いを容れられ藩から周旋方を命じられる。その人脈からして、雲井は新政府に渡りをつけ、米沢藩を大勢に優位な立場に導くことのできる人物であった。しかし、事実はそうではない。彼の薩摩藩に対する強い敵意は戊辰戦争の前後を通じて変わるところがなく、自らの政治的資産である人脈を政府転覆計画のために用いんとした。この点、宮島が薩長土肥4藩主による版籍奉還を「名実ともに正」しいとして、彼らに倣い米沢藩も版籍奉還を上表すべきことを藩主上杉茂憲に進言し、以後、薩長を中心とする「王政一つの日本」を目指して新政府を積極的に盛り立て、それまで敵視していた薩摩藩出身者へも人脈を広げていくのとは対照的である。結局、明治3年12月、雲井は新政府の命で処刑という悲劇的な末路を迎える（**写真3**）。

写真3. 雲井龍雄（石倉惣吉『志士雲井龍雄』より）

さて、前述のごとく、宮島は「朝敵」藩出身者でありながら新政府に出仕し、その汚名を雪ぐべく国家に尽くさんとした。しかし、敗者の国家への尽くし方もまた多様である。会津藩の広沢安任（1830～1891）は幕末、京都にあって藩の公用方として探索周旋活動にあたり、文久3年（1863）には在京中の宮島とも交流があった。戊辰戦争のさなか新政府にとらえられ、明治2年に出獄した後は斗南藩（会津藩は戊辰戦争後、下北に転封。藩名を斗南とする）の少参事として藩政を切り盛りする。広沢もまた宮島同様、国家へ尽くし旧藩の汚名を雪ぐことを選択した一人である。しかし、その道のりは宮島とは大きく異なる。廃藩置県後の明治5年、広沢は谷地頭（現青森県三沢市）に農場を開き、旧会津藩士に自活の道を与えるとともに、当時の国策である殖産興業の一端を担おうとした。もちろん、彼が幕末に培ったネットワークは牧場経営に寄与するところ大であったであろう。明治9年、明治天皇の東北巡幸に随行し、広沢牧場を訪れた参議兼内務卿の大久保利通は、広沢に政府出仕を勧めたが、自分は野にあって国家に尽くすといってこれを拒んだという（**写真4**）。

写真4. 広沢安任（三沢市先人記念館所蔵）

一口に探索周旋の任にあたったといっても、戊辰戦争の敗者といっても、藩によって、あるいは人によって戦後の歩みは様々である。そういった個々人の生を掘り起し、軌跡をたどり、その違いが何に起因するのか考察することを通じて、敗者の立場から明治維新を今一度問い直してみたいと考えている。

EDITOR'S NOTE 編集後記

高倉副センター長によるシベリアのレナ川洪水に対する地球温暖化の影響の話はまさに文理連携の成果だと思う。荒武准教授による昨年12月の公開講演会の報告からは、世界遺産の内実が伺える。友田助教による宮島誠一郎ら明治維新の敗者の人生論は、自分の生き方に反省を迫る。今号も読んで得すること請け合いである。（石渡 明）

"*Ushitora*" is a Japanese word for the "*Ox-Tiger*"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第60号 2014年3月20日発行
発行 東北アジア学術交流懇話会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail:gon@cneas.tohoku.ac.jp